

およそ500年前の戦国時代になるが、京都の町に畿内でも有数の油問屋「奈良屋」があった。当時は「**荳胡麻油**」が主力商品だが、「ごま」という名が付くものの、実はシソ科の植物「荳」の種子から採れる油で、「荳油」とも呼ぶ。因みに、今日ではシソ油とも呼んでいるようである。

荳胡麻油は寺社の灯明油・食用・傘や建材などの塗油として用いられていたが、何と云っても**灯明油の需要が最大**であった。その点、京都は寺社が多く、油を商う店も得意先には事欠かない。「奈良屋」という店は、司馬遼太郎の小説『国盗り物語』で有名な**斎藤道三**が、まだ武将になる前に油商人として活躍をした舞台で、現在の御所より南、東洞院通二条辺りにあったそうである。

折角ですから、小説の中の有名な場面を少し再現してみましょう。

『梶は天竺須弥の山、油は補陀落那智の滝、とうとうたたり、とうたたり、仏天からしたり落つる御油は、永楽善智の穴を通り、やがては灯となり、無明なる、人の世照らす灯明りの・・・』
びたり！と最後の一滴が壺におさまった。……（中略）……庄九郎は油をマスにとり、節面白く唄いはじめた。たたりたたりと、やがて油はマスから七彩の糸となってスーッと永楽銭の四角い穴に吸い込まれ、その下の受け壺に一滴もこぼれず注ぎ込まれた。…… 【「国盗り物語」より】

道三が奈良屋の未亡人・お万阿を籠絡して主人に納まったのは、どれほど意図的であったかは分かりませんが、下位の者が上位の者を討ち倒していく「**下克上**」の時代の象徴だと言えます。家柄とか血筋に関係無く、才覚（能力）さえあれば一国の主も夢ではないということですから、乱世とはいえ活力に満ちた時代でもあります。主役の多くは武士階級ですが、氏素性不明の輩も頭角を現します。因みに、道三自身も元は京都妙覚寺の僧侶・法蓮坊であったと伝わります。

ところで、道三の出発点が油屋であったというのは面白いですね。何となれば、当時の油とは特別に保護された規制品と呼べる代物であり、古い秩序や権威の象徴のようなものだからです。**油は朝廷や足利幕府によって権威づけられた、お墨付きの「ブランド品**」で、特別に許可を得た油商人（商店）だけが取り扱いできたわけです。奈良屋は勿論、その中の一軒です。

需要の大きい灯明油の製造や流通販売を独占的に支配すれば、莫大な利益が見込まれるので、当時の朝廷や足利幕府はその旨みを見逃さず、網の目をかぶせたわけです。

さて、道三は才覚でもって奈良屋の販売量を大いに伸ばしたのですが、それが引き金となって妬みを買ひ、店先を壊されるという事件が起きました。「出る杭は打たれる」の譬え通り、秩序を乱す存在として反感を買ったわけです。その背景には上述のような社会の仕組み、具体的には、京都**大山崎離宮八幡宮**を中核とした、油の生産・流通を独占支配する秩序が存在したのです。

そもそも**大山崎は山城国と摂津国との境に位置しており、水陸両面で軍事上・物流上の要衝**でありました。河川を利用すれば大坂と直結し、西国街道によって山陰地方とも連絡がつきます。余談ながら、現在のJR山崎駅のホームは京都府と大阪府との境にまたがっているそうです。

歴史的にも天王山が重要拠点として有名です。信長を討った後の光秀と秀吉との山崎合戦や、幕末の禁門の変で敗走した真木和泉をはじめ長州藩の一派が最後に自決した場所でもあります。尚、道三自身もこの辺り（大山崎から長岡にかけての「西の岡」）の出身と言われています。

離宮八幡宮（大山崎八幡宮）

八幡宮は清和天皇の代、貞観元年(859年)に宇佐八幡宮から分霊遷座したことに始まります。嵯峨天皇の離宮・河陽宮^{かや}の跡にあり、他の天皇もしばしば訪れては滞在された場所です。

八幡宮と油との関わりですが、伝承によりますと、遷座と同時に大山崎の社司が新しい道具、**長木**^{ちようぎ}による搾油(=テコの原理を利用して油を搾り取る。平安時代の一大発明と呼ばれる。)を始めたとあり、原料は荏胡麻です。実際、八幡宮には「**本邦製油發祥地**」の碑が建てられており、今日でも八幡宮は「油の神様」として製油会社などから崇敬されていますよ。

余談ながら、宮司さんは代々世襲で、ずっと津田氏が引き継いでおられるそうです。

この油は宮中にも献上され、朝廷はその功績を称えて社司に「**油**^{あぶらのつかさ}」の位を与えました。それ以来、**神社仏閣の灯明の油は全て大山崎が納めることとなった**のです。また、諸国の関所や渡し場を自由に通行できるようにし、課役を免除したそうで、相当な税の優遇策でしょう。

末期状態の足利幕府からも油の専売権を与えられました。この結果、八幡宮の許可が無ければ油を売ることも原料の荏胡麻を産地から運ぶこともできなくなりました。全国の油屋にとっては死活問題ですので、やむなく八幡宮に金を納めて製造販売の権利を買い取るわけです。しかし、その権利は一年限りなので、毎年収めなければなりません。こうして八幡宮には莫大な金が入るわけですが、足利幕府は許可権を与える引き換えに、八幡宮から金を取るという仕組みでした。いやはや、専売権・許認可・運上金といった仕組みは、今も昔も似たところがありますね。

油 座

「座」とは、言うなれば商工業者の同業組合です。そもそもは座の構成員は荘園領主を本所と仰いで、販売の独占、関銭・市場税の免除などの特権を得ます。そのことの見返りとなるのが、本所に対しては役務として様々な貢納や奉仕を行なうというものでありました。

座のうちで最も有名なものは石清水八幡宮を本所とする**大山崎の油座**ですが、それ以外にも、祇園社の綿座、北野神社の麴座、奈良興福寺の紙・油・酒座などが挙げられます。

大山崎の**神人**^{じにん}を中心とした「油座」は、朝廷ならびに幕府より油司の特権を得て、油の専売権は原料の仕入れから搾油・販売・輸送にまで広く及んでいます。怖いもの無しの存在ですね。

(油以外にも魚・塩・酒・麴などを兼業するまでになりますが、ここでは割愛します。)

* 神人……神社における様々な役務を担った隷属民のことですが、神社の特権や保護を受けるため、農民や商工業者が神社と特定の関係を結び、これが神人となっていった。一部の神人は神社の自衛軍を組織し、対立する者に対し暴力的行為に訴えることもあった。

先ほど、奈良屋の店が妬みを買って壊されたと述べたが、この神人たちの仕業であるらしい。京に在住し、油神人として営業を認められた「在京の神人」は、本来の大山崎神人「本所神人」とは権限に差があり、大山崎神人が洛中で商売をする時は、「在京の神人」は油の商いを控えていた。

ところが、奈良屋はそういうことはお構い無しに販売量を伸ばしていたのでしょ。油座にも加入していない奈良屋にとっては当然の行為なのだが、本所神人の誇りを傷付けたに違いない。歪んだ特権意識が招いた事件の中から、不合理な仕組みの弱点を道三は学んだようですね。

落 日

決して悪意があって述べるのではないが、座というものが持つ特殊性は、強いて例を出せば、現在のプロ野球機構をイメージさせるところがある。オーナー会議や野球協約が象徴的存在だ。

例えば、一握りのメンバーが排他的な組織を形成し、新規参入障壁が非常に高いようである。他者から見ると不可思議に映るルールがまかり通り、構成メンバーの特権的意識は格別に強い。プロ野球界を発足させたという功績があり、それは称賛されてしかるべきだが、最近の様相だとプロ野球界全体の発展のためというよりは、組織の維持のために汲々としているように見える。「まず制度（組織）ありき」という発想から抜け出ないと、活力は生まれないのではないか。

さて、本題に戻る。

応仁・文明の乱（1467～1477）以降、戦国の世を通じて、京の町中は焼け野原が広がります。更に文明三年（1471）、山名宗全が山崎天王山に城砦を築くなど、大山崎もことごとく戦乱の地となっていました。その結果、大山崎の油座は急速に衰退し、更に信長・秀吉の時代になると、「**楽市楽座**」の自由市場が形成され始めたので、大山崎の特権である油座は崩壊の一途を辿った。また、灯明油も荏胡麻油から菜種油に取って代われ、江戸時代には幕府の灯明油政策の中で、京の灯明油もすべて統制支配されたのである。

山崎に代わって、**菜種油**の生産と販売の一大拠点となったのが摂津国の^{おりおの}遠里小野。難読地名の一つだが、現在の大阪市の最南部・住吉区、大和川を挟んで堺市の北に位置する地域である。

この地で油分の多い菜種の搾油に着手したのであり、その際、新しい道具の^{しめぎ}搾木を発明した。搾木は効率の良さで長木に勝る。明暦（1655～58年）の頃には、諸国の搾油法も長木から締木へとすっかり切り替わったという。荏油から菜種油へと大きく変遷した理由には、荏より菜種の方が栽培しやすく稲の裏作が可能だったこと、搾油しやすかったこと、明るさの点で優れていたことなどが挙げられる。特権的な既得権益が、技術革新と合理性とに負けたと言えそうである。

エピローグ

座の閉鎖性を悪く言ったようだから少しだけ弁護する。特権的商人たちは財力にものを言わせ**連歌**という座敷文化を育て、**山崎宗鑑**を輩出した。彼の名字は山崎という地名から取っている。連歌会に集うのは、仲間うちの連帯意識を確認するにはうってつけの場であったことだろう。

滑稽画「鳥獣戯画」でも有名な鳥羽僧正が、『**信貴山縁起絵巻**』では「山崎の長者の油絞り機」を描いている。既に平安末期には、油で財産を成した者が居たことの証明でもある。

東海道新幹線を通す工事のために八幡宮の境内は大きく分断された。油の神様も文明の利器に席を譲った形となった。その八幡宮の横に「三笑亭」という、てんぷら料理で有名な店がある。元は宿屋だったが、八幡宮からのお下がりのおでこの油で「離宮てんぷら」を売り出したのが最初らしい。

今日、パラフィンで作った洋ローソクが幅を利かせ、アートキャンドルも人気を呼んでいる。ハゼの実から採ったロウで作る和ローソクは珍しい存在となったが、神仏用には根強い存在だ。時には弾けたりしながら、あの揺らめく炎には単なる照明では出せない味がある。